

出家する吾子を送ると老いらくの母は涙を拭きたまひけり
老いの母の涙見まじとひたすらに門^{カド}へを吾れは離^{わか}り來にけり

なにひとつ辛抱出來ぬと吾が性^{さが}を責めたまふなり老いらくの父は

家を出てすでに七年みちのくの故山會津は思ほゆるかも

春雪はなほつもるらし竹折れの音時時に更くる靜か夜

若草にいねて懷へば幼な頃別れし友の臉に浮び來

身に餘る桑を背負ひし乙女子を穗麥の中に避けて通しぬ

麥熟れしだんだん畑の夕暮れをさやゑんどうは紫に咲く

かねてより名のみ聞きぬし古文書を今はまさしく手に取り讀む(文庫蟲子)

この奥に瀧はありとふ溪小徑ひんやりと風は朽木の匂す

むづかしき佛書の講義きく窓に木犀の香の漂ひ來るも

時雨する野邊には人の影もなし畑におりて鴉は鳴くも

朝勤を終りて歸る廻廊ゆ遠き嶺には雪降れる見ゆ

いつしかによりこびおぼゆ朝朝のつめたき中を勤めはげみて

七面山行

熊谷利道

はじめじめとしめりかわかぬ松林に無縁の墓は古りてありけり

登りつきて暗闇のなかに鐘つけり鐘はさびしく谷にひびかふ

大土間のすすけしランブの灯の下に吾れは疲れて草鞋ぬぎたり(本社着)

山の夜のぬるき湯ぶねにひたりけり眼を閉ぢにつつひそけかりけり

溪底はさ霧にたちこめて見わかかねど深きに響く山川の鳴り

業をつんで此の世の中に出て來ると先づ殻
を脱ぐ。それから柔な背みを帯びた羽を廣
げて飛び出す。丁度よい木をみつめてそれ
にとまつて鳴き立てるのである。

暫くするとパーン／＼／＼と板木の
音がした。私は釋迦堂の講習會に出席した
久留島先生の話があつた。その内容は私が
是れまで考へ及ばなかつた子供の心理状態
に對する意味の話であつた。先生の話の中
には次のやうなものもあつた。蟬が餘りに
もよい聲で鳴くものだから子供達が、大き
な袋を造つて可愛い蟬を捕り、糸で首をし
ばり、散々にいぢめたあげくには、羽をも
ぎ取り、頭をむしり無慘な殺し方をする。

此れ等は皆原始時代の人がやつた事である
今でもさういふ性質が子供の心の中に残つ
てゐる。そのまゝにしておくならば、大人
になつてからどんな人間になるか判らない
そこで宗教家が、子供達を教導して、この
悪風を一時も早くなをさなければならぬ
といふ話であつた。

私は先生の話が終ると廊下に出て欄干に
凭れ乍ら前とは違つた氣持で蟬の聲にちつ
と耳を傾けた。